

不正会計の実態分析

一ノ宮 士郎

目 次

1. はじめに
2. 先行研究
3. リサーチデザイン
4. 分析と評価
5. 結論

本稿は、第三者委員会報告などの公表資料に基づき、2004～18年までの15年間におけるわが国の不正会計事例に基づきプロファイリングを行い、不正会計の平均像を描いていくという実態分析を試みた。15年間で3ステージに区分して検証したものの、ステージ間で極端な差は確認されず、逆に類似した平均像が認められた。つまり、わが国では不正会計事例（企業）の平均像が大きく変化しているものではなく、同じような属性を持った事例が繰り返して出現してきたことが見いだされた。

1. はじめに

よく耳にするフレーズに、「利益は意見、キャッシュは事実」という言葉がある。利益は意見であるからこそ、過大・過小表示が問題となるのであり、本稿のテーマに即して言葉を換えれば、「不正会計は印象 (impression)」とでも言えようか。わが国で伝統的に使用されてきた粉飾決算という用語も、文字通りwindow (実態・決算) をdressing (偽る・飾る) することで印象を歪めることを端的に表している (Amat [2019])。したがって、表面的な印象 (意見) に惑わされず、実

態 (事実) は何かをつかむことが大事である (注1)。

過去から現在に至るまでに発生した不正会計を振り返る限り、規制や監督だけでは潜在的な不正を有効に抑止できなかった (注2)。だからこそ経営者による不正会計について、経済面と心理面 (特に動機) を考察する必要があると指摘されてきたが (Giroux [2018])、心理は内面的であり、外部からはうかがい知れない。一方不正の動機 (あるいは誘因) は変わらず、類似した事例が繰り返し出現する傾向があった。このため次善の策ながら、過去の不正会計事例を参考に、アナリストなどの外部利害関係者が注意を払うべき不正会計の



一ノ宮 士郎 (いちのみや しろう)

専修大学経営学部教授。1980年早稲田大学法学部卒業。同年4月、日本開発銀行 (現・日本政策投資銀行) 入行。88年London Business School (Sloan Program) 修了。公認会計士。2015年4月より現職。主な著書に、『QOE [利益の質] 分析』(中央経済社、2008年)、*An Analysis of Japanese Management Styles, Business and Accounting for Business Researchers* (共著、Maruzen Planet、2014年) がある。